

本学教授新著紹介

上智大学編「カトリック大辞典第四巻」

第三巻以来二年を経て待望の第四巻が刊行され本辞典はいよいよその光輝を發揮、学界に高く評価せられつつある。取めるところ日本からマリア。巻頭百十頁に及ぶ日本の大項目は普通のA5版に換算して約二五〇頁にも当る龐大なもので、明治以後の教会事情を中心とし第一巻特輯キリシタンの項と合せて、日本カトリック教会の全貌を示す貴重な資料である。編輯、校閲には本学海老沢教授が当られた他教会史キリシタン時代、イエズス会、パリ外国宣教会、慈善事業、出版事業、その他、小項目、更にプロテスタントの合同、日本正教会、聖公会、マカオなどを執筆、佐藤直助教授また教会史現代、トラピスト会その他女子修道会数項目を執筆されている。が、第三巻の批評にも述べたように、特に戦後日本の急激な変化が充分採入れられていず、戦前の原稿に附加された部分は、木に竹をついだ鵠があること、また一二巻に比し、誤植が相当目立つのは、こうした權威をうたわれている辞典であるだけに惜しまれる。(富山房。昭和二十九年十月刊。B5九〇七頁。二八〇〇円)

石田茂作
和田軍一編「正倉院」

従来正倉院についての書は決して少なくない。が本書はそれらのうち最新のものであるばかりでなく、最も勝れたものということが出来よう。正倉院御物の全貌を一六一枚の写真で示し、和英両文の解説をなし、さらに各部門ごとに手頃な概観が与えられ、その中にもまた豊富な挿画が加えられている。本学原田淑人博士はその巻頭に「正倉院御物の世界的性格」を掲げられ、世界の古代文化の綜合集成としての御物を縦横に論じ、世界の宝庫を紹介されている。また解説ではガラス器を担当された。この他和辻博士の「日本文化と正倉院」和田博士の「正倉院の歴史」などが収められている。(毎日新聞社、昭和二十九年十一月刊。B4三千部限定、一六一図、一七〇頁、三五〇〇円)

メルテン著「社会経済学入門」
岡田純一訳

今日わが国では「経済学入門」とか「経済学概論」とか銘うたれた書物がきわめて数多く発行されている。にも拘らずこの書が訳出されたのは「訳者あとがき」にもあるように、著者が経済学の基本的な問題を簡潔に、解り易く説いていると同時に、それらの諸原則の拠つて立つ基底を、著者のとるキリスト教的社会倫理の立場から評価批判しているからである。もつとも経済学と社会倫理との関係を理論的に追求することが本書の主たる目標ではないから、その意味での理論的な論述を本書に期待することはできない。あくまでこの書は、社会経済学を学ぼうとする学生や一般

の人々に、社会経済学の手ほどきをしようとする啓蒙書の領域内にふみとどまつていたのである。また英独の経済理論書と異つて、ベルギー人によつて書かれていただけに、本書の叙述は日常生活の中から卑近な例をあげて、明解平明に論理を運んでいるところも、経済学は小うるさいもののように考えている人々には親しみ深いであろう。

訳出にあつて、訳者は日本の現実の事情を補充している。その際使用されている資料は、比較的信用のおける最も新しいものを用意深く選んであるから、読者はある程度、理論を学びながら、現実の日本の社会経済の状況をも知ることができよう。

この邦訳書はフランス語版の原書を著名の指示に従つて改訂してあるところにも特色がある。経済学におけるいわゆる「ケインズ革命」以後の理論も、ある程度とり入れられ、しかも比類なく理解し易いように説かれている。専門家には理論的なきわめて物足りないが、入門書としては成功したものといえよう。訳者は本学専任講師。(ドン・ボスコ社昭和三十年一月刊。B6三八〇頁、四〇〇円)

刈田元司訳「ヘンリー・アダムズの教育」

アメリカの文化、思想、文学を考究するものにとつて欠くべからざる古典の訳である。公刊は一九一八年ですでにかなりの時日が経つているのに、これまで日本訳が出なかつたのは、一つには本書がアメリカ十九世紀最大の知性人が自己の生涯をかえりみて

書いた自叙伝であるがために一般の読者に訴えるような華やかな事件の羅列がなく、したがつて日本の出版者がかえりみなかつたことと、もう一つには本書が一種独特のひねくれた英文で書かれたものであるので多くの人が訳出の労と時間を惜しんだためであろう。しかしこの書物が重要な古典であるという事実には変わりなく、ここにはじめてA5判六百ページの講訳を完成された刈田教授の努力は学界に対する貴重な寄与といふべきであろう。このような基礎的な仕事はいたつて地味ではあるが、いずれば誰かがしなければならぬものであり、その意味においても喜びとしたい。(教育書林、昭和三十年一月刊。A5五九六頁、七〇〇円)

受贈交換誌(一九五四・九一)

- | | |
|-----------------|------|
| 愛知大学法経論集 | 一〇一一 |
| 愛知学芸大学研究報告 自然科学 | 四 |
| 同 人文科学 | 四 |
| 愛知学院大学論叢 | 二 |
| アカデミア | 八一九 |
| 青山学院女子短期大学紀要 | 三 |
| 跡見学園国語科紀要 | 三 |
| ビブリア | 三 |
| 文芸研究 | 一 |
| 中央大学文学部紀要 | 一 |

天理図書館
明治大学文芸研究会

中央大学々報 一七〇六、一八〇一—二

同志社大学短期大学部研究年報 四

同志社女子大学学術研究年報 五

愛媛大学歴史学紀要 三

フェリス女学院短期大学論叢 一

ふじ 藤女子短期大学 四

福岡学芸大学紀要 三一四

福岡商大論叢 五〇一—三

風俗研究 五 宗教文化研究所

学苑 一六七一—七三 昭和女子大学光葉会

学習院大学文学部研究年報 一

群馬大学紀要 人文科学 三 三ノ一二、四—七

同 自然科学 三ノ一二、四—七 東京女子大学比較文化研究所

比較文化 一 熊本大学法文学会

法文論叢 五—六 明治大学法学会

法学会誌 七 日本放送協会

放送文化 九ノ九—一〇ノ三 京都大学教養部

茨城大学文理学部紀要 人文科学 四 同志社大学人文学会

人文 一 新潟大学

人文科学 一六、一八 明治大学経営学部人文科学研究室

人文科学 七 関西学院大学文学会

人文論究 五ノ二—四

人文社会 五 弘前大学人文社会学会

実践女子大学紀要 三 順天堂大学

順天堂だより 三ノ三—四

香川大学経済論叢 二七〇—三—四

関西大学学報 二七四

関西学院大学一般教育論叢 一

関東学院短大論叢 五 澁沢青洲記念財団竜門社

経済道徳研究所年報 二 関東学院大学

経済系 二—三 北海学園大学

経済論叢 二 近代文学研究会

近代文学攷 三 日本近世文学会

近世文芸 一 基督教史学会

基督教史学 五

神戸大学教育学部研究集録 八、別冊、一〇

神戸女子学院大学論集 三 関西大学国文学会

国文 三 お茶の水女子大学国語国文学会

国文学 一—三 関西大学国文学会

国会図書館収書通報 八二—八三

国内出版物目録 二九—五—二一

国立国語研究所年報 五

久留米医学会雑誌 一七—七—八

九州大学比較教育文化研究所紀要 三

九州大学教育学部紀要 二

明治学院論叢	三四ノ一―三六ノ二	滋賀大学文学部紀要	自然科学 四
民間放送	二六	同	人文社会教育叢能 四
宮城学院女子大学研究論文集	五―六	史 学	二七ノ四
長崎大学人文社会科学部研究報告	四	史 観	四二
名古屋大学文学部研究論集	七―九	檀蔭文学	六
日本文学	四	宗教研究	一四〇―一四二
日本大学三島教養部研究年報	三	主 流	一八
日本学士院紀要	一一ノ二―一二ノ二	拓殖大学論集	七―八
お茶の水女子大学人文科学紀要	五	東北大学文学部研究年報	五
大分大学文学部研究紀要	人文科学 四	徳島大学文学部紀要	社会科学 四
同	自然科学 一、三	東京女子大学論集	五ノ一
大分大学経済論集	六ノ二―四	富山大学文理学部文学紀要	四
岡山大学教育学部研究集録	一	東洋大学紀要	七
大隈研究	五	和歌山大学文学部紀要	教育科学 三
大谷学報	三四ノ二―三	早稻田学報	八ノ六―九ノ一
立正大学文学部論叢	二	山形大学紀要	人文科学 三ノ二
立命館文学	一一―一二七	山口大学文学会誌	五ノ二
竜谷大学論集	三四八	山口女子短期大学研究報告	三
佐賀大学教育学部研究論文集	四	横浜国立大学人文紀要	二ノ三
埼玉大学紀要	人文社会科学 三	横浜市立大学紀要	A7
札大商経論叢	四		
成城文芸	一一二		
世界の動き	三三―三五		
		札幌短期大学文泉学会	
		成城大学文学部	
		外務省情報文化局	
		早稻田大学史学会	
		大阪檀蔭女子大学	
		日本宗教学会	
		同志社大学英文学会	